

地域看護学

1 構 成 員

	平成 26 年 3 月 31 日現在	
教授	2 人	
病院教授	0 人	
准教授	1 人	
病院准教授	0 人	
講師（うち病院籍）	0 人	(0 人)
病院講師	0 人	
助教（うち病院籍）	2 人	(0 人)
診療助教	0 人	
特任教員（特任教授、特任准教授、特任助教を含む）	0 人	
医員	0 人	
研修医	0 人	
特任研究員	0 人	
大学院学生（うち他講座から）	0 人	(0 人)
研究生	0 人	
外国人客員研究員	0 人	
技術職員（教務職員を含む）	0 人	
その他（技術補佐員等）	0 人	
合計	5 人	

2 教員の異動状況

異あさみ	（教授）	（H16.4.21～現職）
鈴木みずえ	（教授）	（H20.8.1～現職）
大塚敏子	（准教授）	（H20.4.1～ 講師、H24.8.1～現職）
水田明子	（助教）	（H20.4.1～現職）
今田万里子	（助教）	（H24.4.1～現職）

3 研究業績

数字は小数 2 位まで。

	平成 25 年度	
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	6 編	(4 編)
そのインパクトファクターの合計	2.65	
(2) 論文形式のプロシーディングズ及びレター	6 編	
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(3) 総説数（うち邦文のもの）	7 編	(7 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(4) 著書数（うち邦文のもの）	5 編	(5 編)
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	2 編	(2 編)

そのインパクトファクターの合計	0.00
-----------------	------

(1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 鈴木みづえ, 桑原 弓枝, 吉村 浩美, 内田 達二, 水野 裕, 急性期病院における看護師の認知症に関連した症状のある患者に対する看護介入とパーソン・センタード・ケアに関する意識の関連, 日本早期認知症学会誌, 6(1), 58-64, 2013
2. 鈴木みづえ, 桑原 弓枝, 吉村 浩美, 内田 達二, 菊地 慶子, 水野 裕, 急性期病院の看護師が感じる認知症に関連した症状の対処困難感と看護介入の関連, 日本早期認知症学誌, 6(1), 52-57, 2013

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. 牧野公美子, 鈴木みづえ, 菊地慶子, 木本明恵, 中込敏寛, タクティールケア実践者のケア肯定感の因子構造とその関連要因, 日本認知症ケア学会誌, 12(2), 354-366, 2013

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Greiner C, Makimoto K, Suzuki M, Yamakawa M., Reliability and validity of the Algase Wandering Scale - version 2 for Japanese people with dementia., Nurs Health Sci. 2013 Dec; 15(4): 480-8. doi: 10.1111/nhs.12061. Epub 2013 Jun 18. (Impact Factor:1.717)
2. Takai Y, Yamamoto-Mitani N, Suzuki M, Furuta Y, Sato A, Fujimaki Y., Developing and validating a Japanese version of the Assessment of Pain in Elderly People with Communication Impairment., Archives of Gerontology and Geriatrics. 2013 403-410. doi: 10.1016/j.archger.2013.06.002. Epub 2013 Jun 24. (Impact Factor:0.936)
3. 井口真紀*, 大石鮎美, 村上典子, 石川恭子, 熊谷有起, 小池恵史朗, 中澤悠, 鈴木みづえ, 谷重喜, 伊藤 友孝, 歩行動作の多面的評価と解析に基づく高齢者に対する転倒予防方法の意識付け, 日本早期認知症学会誌, 6(1), 65-70, 2013

インパクトファクターの小計

[2.653]

(2-1) 論文形式のプロシーディングズ

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Mizue Suzuki, Yukari Takai, Yoshie Furuta, Hajime Ooshiro, Noriko Mitani Yamamoto, Masao Kanamori, Yumi Matsui, Ayami Sato, Prevalence of pain and the relationship between pain and physical/psychiatric functions among the elderly with dementia in Japanese geriatric facilities, Nutrition, Health & Aging 17(S1), S675-S676, 2013

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Yukari Takai, Yu Fujimaki, Mizue Suzuki, Ayami Sato, Yoshie Furuta, Noriko-yamamoto-mitai, Examining the influence pain-related behaviors among older adults with dementia in Japan, The Journal of Nutrition, Health & Aging 17(S1), S605, 2013
2. Yasuyo Tanaka, Mizue Suzuki, The Effects of the Feeding-swallowing Training Program of chopped up French style meals for Japanese elderly suffering from dysphagia, The Journal of Nutrition, Health & Aging 17(S1), S644-S6445, 2013
3. Hiromi Yoshimura, Mizue Suzuki, Tomomi Takagi, A comparative study based on years of nursing experience and types of behavioral and psychological symptoms of dementia (BPSD) that nurses find difficult to care, Nutrition, Health & Aging 17(S1), S737, 2013
4. Mayumi Kato, Yoshimi Taniguchi, Akiko Sekii, Yasuyoshi Asakawa, Tomoko Hiramatsu, Tome Ikezoe, Tadahiko Kamegawa, Mizue Suzuki, Development of a clinical judgment rubric for fall prevention constructed by multiple professions, Nutrition, Health & Aging 17(S1), S851-852, 2013
5. Masao Kanamori, Seiichi Nakai, Mizue Suzuki, Youko Tatara, Yoshifumi Nagai, Heat Stroke and excess mortality of elderly related to very hot summer in Japan, Nutrition, Health & Aging 17(S1), S508, 2013

(2-2) レター

(3) 総 説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 鈴木みずえ, Person-centred Care の理念と動向, 看護研究, 46(7), 644-659, 2013
2. 鈴木みずえ, 上野桂子, 中間浩一, 深堀浩樹, 山本則子, 高齢者訪問看護質指標(転倒予防)を用いたインターネットによる訪問看護支援システムの有効性 訪問看護師の自己評価からの分析, コミュニティケア, 15(8), 60-64, 2013

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの (学内の共同研究)

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 吉村 浩美, 鈴木 みずえ, 高木 智美, 江上 直美, 【Person-centred Care の理論の現状と看護研究としての展望】 急性期病院における Person-centred Care をめざした高齢者集団ケアの取り組み: 認知症ケアマッピング(DCM)の導入と展開, 看護研究, 46(7), 713-722, 2013.
2. 桑野 康一, 鈴木 みずえ, 下山 久之, 遠藤 英俊, 【Person-centred Care の理論の現状と看護研究としての展望】 地域における認知症ケアマッピング(DCM)を用いた施設間相互評価の有効性, 看護研究, 46(7), 700-712, 2013
3. 内田 達二, 鈴木みずえ, 【Person-centred Care の理論の現状と看護研究としての展望】 ケアスタッフの Person-centred Care の意識や実践を測定するための尺度の開発に関する研究の動向, 看護研究, 46(7), 687-699, 2013.12

4. 田島 明子, 鈴木みずえ, 【Person-centred Care の理論の現状と看護研究としての展望】
Person-centred Care をめざした認知症ケアマッピングにおける研究の動向, 看護研究,
46(7), 674-686, 2013
5. 加藤 滋代, 鈴木 みずえ, 院内デイケアにおける認知症高齢者の転倒予防, 臨床老年看護, 20(2),
81-87, 2013

(4) 著 書

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの
 1. 鈴木みずえ, いま求められている急性期病院における認知症看護、鈴木みずえ編集, 急性期病院で治療を受ける認知症高齢者のケアパーソン・センタードな視点から進める, 2-11, 日本看護協会出版会 2013
 2. 鈴木みずえ, 身体治療を受ける認知症高齢者の看護に必要な専門知識、鈴木みずえ編集, 急性期病院で治療を受ける認知症高齢者のケアパーソン・センタードな視点から進める, 12-26, 日本看護協会出版会 2013
 3. 鈴木みずえ, 認知症高齢者に対応する際に必要な倫理的視点、鈴木みずえ編集, 急性期病院で治療を受ける認知症高齢者のケアパーソン・センタードな視点から進める, 12-26, 日本看護協会出版会 2013
- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの
 1. 内山真, 尾崎章, 兼板佳, 栗山健一, 小山恵美, 佐々木俊則, 巽あさみ, 田中克俊, 谷川武, 中板育美, 長谷川克己, 藤原英憲, 道永麻里: 健康づくりのための睡眠指針 2014, 厚生労働省健康局, 平成 26 年 3 月, 東京
 2. 柳川洋, 尾島俊之, 北村邦夫, 中村好一, 倉田貞美, 近藤今子, 巽あさみ, 千原泉, 坪井聡, 坪見利香, 中村美詠子, 西山慶子, 原岡智子, 水田明子, 渡辺晃紀（五十音順）, 保健指導ノート 2013 公衆衛生の現状, (社) 日本家族計画協会, 東京, 2014

(5) 症例報告

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの
 1. 巽あさみ, 鎌田隆, 内野文吾, 住吉健一, 荒井方代, 落合陽子, 大場寛子, 波多野美咲, 大野雪絵, 佐野雪子, 川上智恵: 職場におけるメンタルヘルス対策としての睡眠保健指導の評価に関する研究報告書, 2013
 2. 巽あさみ, 小林章雄, 飯田忠行, 鎌田隆, 住吉健一, 佐野雪子, 川上智恵, 内野文吾, 荒井方代, 落合陽, 大場寛子, 波多野美咲, 大野雪絵, 渡辺留美: 職場における睡眠保健指導システムの開発に関する研究報告, 平成 26 年 1 月
- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

4 特許等の出願状況

	平成 25 年度
特許取得数（出願中含む）	0 件

5 医学研究費取得状況

（万円未満四捨五入）

	平成 25 年度
（１）文部科学省科学研究費	8 件 (649 万円)
（２）厚生労働科学研究費	1 件 (50 万円)
（３）他政府機関による研究助成	0 件 (0 万円)
（４）財団助成金	0 件 (0 万円)
（５）受託研究または共同研究	0 件 (0 万円)
（６）奨学寄附金その他（民間より）	0 件 (0 万円)

（１）文部科学省科学研究費

- ・ 巽あさみ(研究代表者), 基盤研究 (C), 職域のうつ病・自殺を予防するための睡眠保健指導 ICT システムの開発, 150 万円（新規）
- ・ 巽あさみ(研究分担者), 基盤研究 (C) 発達障害児の養育者に対する保健師および保育士の支援実態と相互役割期待, 10 万円（継続）
- ・ 鈴木みづえ(研究代表者), 基盤研究 (B), 臨床判断プロセスを基盤とした認知症高齢者のための転倒予防包括看護質評価指標の開発, 260 万円（継続）
- ・ 鈴木みづえ(研究代表者), 挑戦的萌芽, 看護師が困難と感じる認知症の行動心理症状の明確化と急性期認知症の看護モデルの開発, 104 万円（継続）
- ・ 鈴木みづえ(研究分担者), 基盤研究 (B), 長期療養施設における疼痛ケアの質向上のための教育プログラム開発, 研究代表者 山本則子, 10 万円（新規）
- ・ 鈴木みづえ(研究分担者), 基盤研究 (B), 臨床判断能力育成を包括した転倒予防のコンピューターシミュレーションプログラムの開発, 研究代表者 加藤真由美, 15 万円（継続）
- ・ 大塚敏子(研究代表者), 基盤研究 (C), 発達障害児の養育者に対する保健師および保育士の支援実態と相互役割期待 40 万円（継続）
- ・ 水田明子(研究代表者), 基盤研究 (C), 中学生の抑うつと家族機能及びソーシャルサポートの関連, 60 万円（継続）

（２）厚生労働科学研究費

- ・ 鈴木みづえ(研究分担者): 介護施設、一般病院における認知症 BPSD 初期対応の効果検証に関する研究, 研究代表者 服部英幸(長寿医療センター), 50 万円（新規）

（３）他政府機関による研究助成

（４）財団助成金

（５）受託研究または共同研究

6 新学術研究などの大型プロジェクトの代表, 総括

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0 件	0 件
(2) シンポジウム発表数	0 件	1 件
(3) 学会座長回数	0 件	6 件
(4) 学会開催回数	0 件	0 件
(5) 学会役員等回数	0 件	17 件
(6) 一般演題発表数	7 件	

(1) 国際学会等開催・参加

- 1) 国際学会・会議等の開催
- 2) 国際学会・会議等における基調講演・招待講演
- 3) 国際学会・会議等でのシンポジウム発表
- 4) 国際学会・会議等での座長
- 5) 一般発表

口頭発表

ポスター発表

1. Yukari Takai, Yu Fujimaki, Mizue Suzuki, Ayami Sato, Yoshie Furuta, Noriko-yamamoto-mitai, Examining the influence pain-related behaviors among older adults with dementia in Japan, The 20th IAGG word congress of gerontology and geriatrics, June23-27, 2013, Korea
2. Yasuyo Tanaka, Mizue Suzuki, The Effects of the Feeding-swallowing Training Program of chopped up French style meals for Japanese elderly suffering from dysphagia, The 20th IAGG word congress of gerontology and geriatrics, June23-27, 2013, Korea
3. Mizue Suzuki, Yukari Takai, Yoshie Furuta, Hajime Ooshiro, Noriko Mitani Yamamoto, Masao Kanamori, Yumi Matsui, Ayami Sato, Prevalence of pain and the relationship between pain and physical/psychiatric functions among the elderly with dementia in Japanese geriatric facilities, The 20th IAGG word congress of gerontology and geriatrics, June23-27, 2013, Korea
4. Hiromi Yoshimura, Mizue Suzuki, Tomomi Takagi, A comparative study based on years of nursing experience and types of behavioral and psychological symptoms of dementia (BPSD) that nurses find difficult to care, The 20th IAGG word congress of gerontology and geriatrics, June23-27,2013, Korea
5. Mayumi Kato, Yoshimi Taniguchi, Akiko Sekii, Yasuyoshi Asakawa, Tomoko Hiramatsu, Tome Ikezoe, Tadahiko Kamegawa, Mizue Suzuki, Development of a clinical judgment rubric for fall prevention constructed by multiple professions, The 20th IAGG word congress of gerontology and geriatrics, June23-27, 2013, Korea
6. Masao Kanamori,Seiichi Nakai, Mizue Suzuki, Youko Tatara, Yoshifumi Nagai, Heat Stroke and

excess mortality of elderly related to very hot summer in Japan, The 20th IAGG world congress of gerontology and geriatrics, June23-2, 2013, Korea

7. Ryo Kondo, Mizue Suzuki, Masaaki Nagashima, Takashi Mizushima, EFFECTS OF DYNAMIC-INTENSIVE EXERCISE FOR HEALTH-RELATED QUALITY OF LIFE IN CHRONIC STROKE PATIENTS, 6th WCPT-AWP & 12th ACPT Congress 2013, September 5-9, 2013, Nan Shan Education & Training Center (ETC), Taichung, Taiwan

(2) 国内学会の開催・参加

- 1) 主催した学会名
- 2) 学会における特別講演・招待講演
- 3) シンポジウム発表
 1. 鈴木みずえ：パーソン・センタード・ケアの理論と実践：パーソン・センタード・ケアの理念と認知症ケアマッピング(DCM), 第14回日本早期認知症学会, 2013,9, 浜松
- 4) 座長をした学会名
 - 巽あさみ 日本看護医療学会, 2013, 9, 名古屋
 - 鈴木みずえ 第14回日本認知症ケア学会, 2013.5, 福岡
 - 鈴木みずえ 第14回日本早期認知症学会, 2013.9, 浜松
 - 鈴木みずえ 第10回転倒予防医学研究会研究集会, 2012.10, 東京
 - 鈴木みずえ 第21回日本慢性期医療学第3回アジア慢性期医療学会, 2014.11, 東京
 - 鈴木みずえ 平成26年度日本認知症ケア学会東海地域大会, 2014.1, 名古屋

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

- 巽あさみ 日本産業衛生学会 代議員
- 巽あさみ 日本地域看護学会 評議員 査読委員
- 巽あさみ 日本産業衛生学会 東海地方会 理事
- 巽あさみ 日本産業看護学会 理事 編集委員長
- 巽あさみ 日本看護医療学会 理事 査読委員
- 巽あさみ 日本産業ストレス学会 理事 編集委員
- 巽あさみ 日本産業衛生学会 産業精神衛生研究会世話役
- 巽あさみ 日本産業衛生学会 職場ストレス研究会 ワーキングメンバー
- 巽あさみ 日本産業衛生学会 就労女性健康研究会世話役
- 鈴木みずえ 日本看護研究学会 理事 査読委員 東海地方会世話人
- 鈴木みずえ 日本老年看護学会 評議委員
- 鈴木みずえ 日本認知症ケア学会 評議委員 査読委員 東海部会委員
- 鈴木みずえ 日本看護科学学会第34回日本看護科学学会学術集会 企画委員会
- 鈴木みずえ 第13回日本認知症ケア学会大会 大会実行委員
- 鈴木みずえ 転倒予防医学研究会 世話人 転倒予防医学研究会 学術委員
- 鈴木みずえ 日本早期認知症学会 理事 第14回日本認知症ケア学会実行委員

8 学術雑誌の編集への貢献

	国 内	外 国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	0 件	0 件

（1）国内の英文雑誌等の編集

（2）外国の学術雑誌の編集

（3）国内外の英文雑誌のレフリー

鈴木みずえ：1 回 American Journal of Alzheimer's Disease and Other Dementias（米国）

鈴木みずえ：2 回 Geriatrics and Gerontology International（日本）

鈴木みずえ：1 回 Japanese Journal of Nursing Science（日本）

9 共同研究の実施状況

	平成 25 年度
（1）国際共同研究	0 件
（2）国内共同研究	6 件
（3）学内共同研究	0 件

（1）国際共同研究

（2）国内共同研究

- ・ 巽あさみ, 小林章雄（愛知医科大学）, 飯田忠行（藤田保健衛生大学）：職場におけるうつ病・自殺予防のための睡眠保健指導 ICT システムの開発に関する研究
- ・ 鈴木みずえ, 泉キヨ子（帝京科学大学）, 谷口好美, 平松知子, 加藤真由美（金沢大学）, 水谷信子（甲南女子大学）, 丸岡直子（石川県立大学）, 岡本恵理（三重県立看護大）, 加藤真由美（金沢大学）, 小林小百合（東京工科大学）：臨床判断プロセスを基盤とした認知症高齢者のための転倒予防包括看護質評価指標の開発
- ・ 鈴木みずえ, 高井ゆかり、山本則子（東京大学）：長期療養施設における疼痛ケアの質向上のための教育プログラム開発
- ・ 鈴木みずえ, 加藤真由美（金沢大学）：臨床判断能力を包括した転倒予防のシュミレーションプログラムの開発
- ・ 鈴木みずえ, 吉村浩美（聖隷三方原病院）：急性期病院における認知症看護モデルの開発
- ・ 鈴木みずえ、服部英幸（長寿医療センター）：介護施設、一般病院における認知症 BPSD 初期対応の効果検証に関する研究

（3）学内共同研究

10 産学共同研究

	平成 25 年度
産学共同研究	0 件

11 受賞

- (1) 国際的な授賞
- (2) 外国からの授与
- (3) 国内での授賞

巽あさみ 日本産業衛生学会 優秀ポスター賞 2013.5

大塚敏子 日本地域看護学会 奨励論文賞 2013.8

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 本研究は日本の現役世代の自殺を予防するため、睡眠を切り口としたメンタルヘルス対策をめざし、保健師に対して適切な保健指導システムを開発することが目的である。不眠はうつ病に多く見られる症状であり、うつ病より前に顕在化する不眠に対してシステムを活用した保健指導介入による改善効果を目的に実施した介入研究をした。20歳～64歳までの同意が得られた労働者 943 人に対して1回目の「睡眠に関する調査」を実施し、高リスク者と判定された内の介入群に睡眠保健指導マニュアル（巽ら.2012）に沿って、約 10～15 分の個別保健指導を実施した。3か月後に経過をみるために1回目と同項目の「睡眠に関する調査」を実施した。1回目、2回目共に調査に回答した者のうち、介入群の保健指導実施者の男性 87 人と、非介入群の要保健指導者（要保健指導であるが保健指導を実施していないコントロール群）の男性 88 人について PSQI 得点、K6 得点について解析した。その結果、PSQI 得点、K6 得点ともに介入群のほうが非介入群より有意に改善していた（ともに $p < 0.001$ ）。PSQI 得点が改善した群では、「睡眠時間」が平均 5.83 時間から 6.25 時間と約 25 分増加し、入眠困難、中途覚醒、トイレにおきることなど「睡眠困難得点」が有意に減少していた（ $p < 0.001$ ）。睡眠が改善した主観的理由については、「運動を始めた、タバコを減らした、お茶・コーヒーを減らした」など保健指導されたことにより生活を振り返り、自ら積極的に行動を起こしたことによって PSQI 得点、K6 得点の改善が示唆された。以上のことから、本システムにより不眠の高リスク者と判定された対象者に保健師により適切な保健指導をすることで睡眠が改善されることがわかりうつ病等が予防できる可能性が推測され、本睡眠保健指導システムは効果があることが示唆された。

（巽あさみ、小林章雄（愛知医科大学）、飯田忠行（藤田保健衛生大学））

2. 臨床判断プロセスを基盤とした認知症高齢者のための転倒予防包括看護質評価指標の開発

臨床判断プロセスを基盤とした認知症高齢者のための転倒予防包括看護質評価指標の各項目に関して分担研究者とともに開発、老人保健施設、療養型病床群などに勤める看護師を対象に指標の信頼性・妥当性に関する調査を実施した。

（鈴木みずえ、泉キヨ子（帝京科学大学）、谷口好美、平松知子、加藤真由美（金沢大学）、水谷信子（元兵庫県立大学）、丸岡直子（石川県立大学）、岡本恵理（三重県立看護大）、加藤真由美（新潟大学）、小林小百合（東京工科大学）、菊地慶子）

3. 急性期病院における認知症看護モデルの開発

急性期病院の高齢者集中ケアプログラムやDVDを用いた認知症高齢者に関する看護研修を開発し、認知症高齢者に対する効果や看護師に対する効果を明らかにした。

（鈴木みずえ、吉村浩美（聖隷三方原病院））

4. 臨床判断能力を包括した転倒予防のシュミレーションプログラムの開発

看護師の転倒予防に関する臨床判断能力を向上させるための転倒予防のシュミレーションプログラムの開発に取り組んだ。特に、Tanner、Lasater のモデルを転倒予防の実践に応用するための検討や転倒予防実践の学習の進捗状況評価するためのループブックを作成し、転倒事例を用いたプログラムを作成した。

(鈴木みずえ, 加藤真由美 (金沢大学))

5. 長期療養施設における疼痛ケアの質向上のための教育プログラム開発

認知症高齢者の観察法による日本語版アビー痛みスケール (APS-J) とセルフレポートによる疼痛の有セルフレポートである疼痛と観察法に関する疼痛は2割であり、言語的な訴えのできない認知症高齢者の疼痛を十分アセスメントしていない可能性や認知症高齢者の疼痛が BPSD を促進していることが示唆された。(鈴木みずえ, 山本則子, 高井ゆかり)

6. 介護施設、一般病院における認知症 BPSD 初期対応の効果検証に関する研究

認知症高齢者の BPSD の実態と認知症高齢者のケア依存度と ADL や BPSD の関係について、ケア依存度を悪化させる要因は ADL などの身体機能だけではなく、無為・無関心などアパシーと呼ばれる症状が関係しており、心身機能の悪化を促進している可能性も示唆された。

(鈴木みずえ, 服部英幸 (長寿医療センター))

7. 発達障害児の養育者に対する保健師および保育士の支援実態と相互役割期待

「発達障害があると思われるが診断はされていない子ども」いわゆるグレーゾーンの子どもの持つ養育者に対し、地区担当保健師および保育士がどのように連携して支援していけば養育者の心理的不安の軽減や適切な養育行動の促進につながるのかについて研究を行っている。2013年10月～2014年1月に保育士12名へのインタビュー調査を実施した。現在、得られたデータについて研究分担者のスーパーバイズを受けながら分析中である。

(大塚敏子, 巽あさみ)

8. 中学生の抑うつ状態と家族機能及びソーシャルサポートの関連

中学生の抑うつと家族機能の関連を、家族機能測定尺度(FACESⅢ)の下位尺度別(凝集性、適応性)に明らかにした。分析対象は公立中学校8校1年生～3年生2,780人。抑うつ評価尺度(日本語版DSRS-C)のカットオフ値16点で抑うつ高群と低群に分け、凝集性と適応性の平均値についてt検定を用いて比較した。凝集性の平均値は抑うつ低群34.3、高群27.2 ($P<0.001$)、適応性の平均値は抑うつ低群28.9、高群26.4 ($P<0.001$)であり、どちらも平均値は抑うつ高群より低群で高かった。適応性より凝集性の平均値の差が大きいことから、抑うつリスクを家族機能の下位尺度別に検討する必要が示唆された。

(水田明子, 野田龍也, 巽あさみ, 尾島俊之)

13 この期間中の特筆すべき業績、新技術の開発

1. 睡眠保健指導支援システムは厚生労働省「健康づくりのための睡眠指針の改定に関する検討会」において、発表した(保健師による短時間保健指導の実践～健康づくりのための睡眠指針改定参考資料～国立大学法人浜松医科大学医学部看護学科地域看護学講座 巽あさみ

<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/0000042481.pdf>。

今後、厚生労働科学研究費補助金による「循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策政策研究事業）研究課題名：健康日本 21（第 2 次）に即した睡眠指針の改定に資するための疫学研究にかかる調査研究（代表：兼板佳孝大分大学・医学部・公衆衛生・疫学講座）の研究分担者として、睡眠指針の普及と啓発に関する研究を実施していくことになった。

2. 臨床判断プロセスを基盤とした認知症高齢者のための転倒予防包括看護質評価指標の開発

臨床判断プロセスを基盤とした認知症高齢者のための転倒予防包括看護質評価指標の各項目に関して分担研究者とともに開発した。認知症高齢者の転倒予防看護介入の具体的な内容は国内外でも十分明らかではないことから指標として初めて具体的に示した。

（鈴木みづえ，泉キヨ子（帝京科学大学），谷口好美，平松知子，加藤真由美（金沢大学），水谷信子（元兵庫県立大学），丸岡直子（石川県立大学），岡本恵理（三重県立看護大），加藤真由美（新潟大学），小林小百合（東京工科大学））

14 研究の独創性，国際性，継続性，応用性

1. 急性期病院における認知症看護モデルの開発

急性期病院の高齢者集中ケアや認知症高齢者に関する看護研修プログラムを開発し、今後、さらにこれを基盤に具体的な急性期認知症看護モデルを開発する。

（鈴木みづえ、吉村浩美（聖隷三方原病院））

15 新聞，雑誌等による報道

1. 静岡県産業安全衛生大会、特別講演「職場のメンタルヘルス対策としての睡眠の重要性」講演内容が報道された。（労基しずおか,2013,11月号,2013.11.1）
2. 厚生労働省：「健康づくりのための睡眠指針の改定に関する検討会」委員として、検討会に参画し、TV、新聞等で報道された。（静岡新聞,大自在）2014.3.17 朝刊、NHK ニュースウォッチ 9,2014.3.25 など）
3. 平成 25 年 9 月 22 日、静岡新聞「個性重視し、ケア」浜松で早期認知症学会大会のシンポジウムの発表内容が報道された。
4. 平成 26 年 3 月 16 日（日）、在宅看護学が主催した「回想法を知り、地域で生かすシンポジウム・ワークショップ」が静岡新聞で報道された。（2014.3.21 静岡新聞認知症ケア手法、回想法紹介）
5. 平成 26 年 3 月 16 日（日）、在宅看護学が主催した「回想法を知り、地域で生かすシンポジウム・ワークショップ」が中日新聞で報道された。（2014.3.17 中日新聞、認知症予防回想法を地域で推進 浜松医科大でシンポ）
6. 平成 26 年 3 月 16 日（日）、在宅看護学が主催した「回想法を知り、地域で生かすシンポジウム・ワークショップ」が読売新聞で報道された。平成 26 年 3 月 17 日、読売新聞、認知症対策 回想法紹介 思い出かたり脳元気に
7. 認知症高齢者のタクティールケアの効果に関する研究が日経 Health で紹介された。

日経 Health 自分でできる美女式マッサージ、介護の場面でも注目されるタクティールケア：認知症患者との言葉を越えたコミュニケーション、p.34,日経 BP 社, 2014